



「菰野野草園のベニスシヤマユリ」

(撮影：小林会員)

令和 7 年 8 月号 Vol. 256

(2025 年)

発行：令和 7 年 8 月 11 日

あつぎ観光ボランティアガイド協会

ホームページ <https://atugikanvola.sakura.ne.jp>

メールアドレス atugikanvola@yahoo.co.jp

発行責任者 会長 田頭 文昭 編集担当者 澤田 正弘

《勉強会 健康体操「カイロプラクティック(※)」》

行事区分：会員研修

日 時：7 月 12 日(土) 11:30~12:10

場 所：あつぎ市民交流プラザ ルーム 604

講 師：西川将会員

参 加 者：会員 15 名

(※) 脊椎を中心とした身体の構造と機能に注目した手技療法で、痛みの軽減・機能の改善・自然治癒力を高める。

定例会終了後にカイロプラクターである西川会員による健康体操を指導していただきました。ハイキングガイド出発前の準備運動と会員の健康に役立つ事を目的として行いました。

まず足のストレッチから始まりました。片足を伸ばしこ

れを 40 秒間静止。骨のゆがみをなくして、筋肉を付ける効果があるそうです。

次に足の筋肉を動かす(骨を動かす)運動をしました。運動後に参加者の右足の関節を



専用ゴムバンドで圧迫し、その後開放すると「右足の方が軽くなった」との感想がありました。これは骨と骨の間にある潤滑液をスムーズに動かすための体操でした。

質疑応答になり会員から病院とカイロプラクティックの違いは何か?という質問がありました。病院は病気を治すために手術、投薬、湿布、痛み止め等の処置をして病気を治すところ、カイロプラクティックは健康を維持す

るための手当や運動の指導を行うところという回答がありました。

(澤田 記)



西川会員

《まちとつながるボラの輪》

行事区分：交流会（厚木市ボランティア連絡協議会主催行事）

日 時：7月15日（火）13：30～16：00

場 所：あつぎ市民交流プラザ amyu スタジオ

参 加 者：会員5名

「まちとつながるボラの輪」と銘打って、厚木市ボランティア連絡協議会による市内で活動するボランティア団体の説明会が初めて開催されました。「どんなボランティア団体があるのか」「ボランティア活動に興味がある」「自分のスキル経験が活かせるのか」といった思いを持つ市民の方が気軽に聴ける機会を設けると同時に、ボランティア団体同士の交流を目的として今回16団体が参加しました。赤十字、手話、車椅子の知識普及といった介護看護系団体、保育、教育、趣味といった次世代の教育が主の団体、地域の交流を目的とした団体がありました。県助成金情報のコーナーもあり行政も力を入れています。入場自由、市民の方に知ってもらい、また自分の興味ある団体に出会えることを目的にした催しです。



天候があいにく悪く一般来場者は10名程でした。冒頭、協議会会長の挨拶では、「今回は初めてであり、事前の情宣活動が遅くなった」とのことでしたが、団体同士の交流は活発で楽しく、我が観ボラも積極的にアピールすることができました。会員募集の勧誘は難しかったものの「地元は結構知らない」「ハイキングはしたいけど距離が心配」「史跡に常にガイドしてくれる人がいればいい」「神社の内容を知りたい」「何を見れば、催し物を教えてくれるの？」等々、当協会への質問、要望を知ることができました。

また、思ったより、観光への興味をお持ちであると感じました。他の団体に当協会を知ってもらい、情報交換ができる様になれば、ガイドの依頼、ひいては会員勧誘のチャンスが増えるのではと感じる事ができた交流会でした。（石川 記）





会 員 投 稿

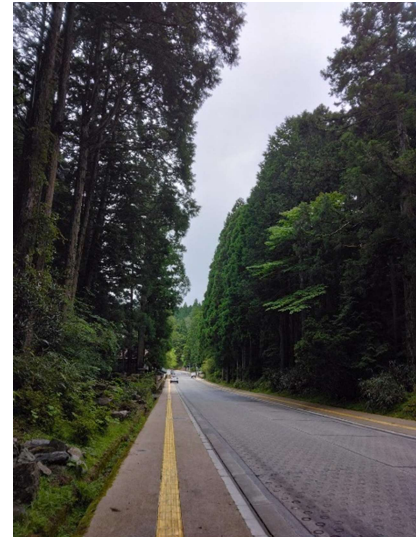
《 四国八十八カ所巡礼番外編 高野山（2） 》

清田 邦男

令和6年6月21日2度目の高野山訪問。高野山へは、高速バスで、淡路島を渡り、大阪へ、南海なんばから南海電車、高野山ケーブルを乗り継ぎ、高野山駅へ向かいました。このほか徳島からフェリーに乗り、和歌山経由で高野山に向かうルートもあり、いつかは船で和歌山港から行ってみたいと思っています。

さて、高野山駅からバスで山中を通り町の中心部に向かいます。遍路は歩くのが修行！私はただ一人、町の入口である女人堂でバスを降り、歩くことにしました。

高野山には高野七口といわれる7つの入口があり、明治5年女人禁制が解かれるまでは、そこに女性のための参籠所が設けられていました。このバス停の女人堂は現存する唯一のもので、当時は7つの女人堂で最大のものだったそうです。



女人堂から高野町中心部へ向かう道

杉林の中を通り過ぎ、三代将軍家光が建立した徳川家霊台を始め寺が並ぶ道を進みます。



金剛峯寺

高野町役場を過ぎるとこの日の宿、無量光院です。宿に荷物を預け、出発。余談ですが、高野山は一山が高野町という一つの地方公共団体です。消防署もあります。人口2,600人。「高野山の町～高野山はなぜ“山上の仏教都市”に？」のタイトルで2022年にNHKのプラタモリで放映された時の話では住民の3人に1人がお坊さんだそうです。まさに山上の仏教都市ですね。

「比叡山といえば延暦寺、高野山といえば金剛峯寺」これは私が1回目この山を訪れたとき、観光客からお薦めの場所を尋ねられ、奥の院、壇

上伽藍とともに金剛峯寺をあげたときのフレーズです。

この金剛峯寺ですが、もともとは高野山の総称でした。高野山は一山境内地といい、山全体を金剛峯寺と称したのです。その後明治になり、金剛峯寺は高野山真言宗総本山の寺だけを指す名称となりました。

現在の建物は、文久3年(1863年)に建てられたものですが、なぜか文禄4年(1595年)に関白豊臣秀次が自刃した「秀次自刃の間」と呼ばれる座敷があります。

一見不思議ですね。文禄2年(1593年)に豊臣秀吉が母の大政所の菩提のため、建物を寄進したのですが、焼失してしまい、それを文久3年に焼失前の建物そのままに再建したためです。

建物内には、天皇、上皇が登山（とうざん）されたときに応接間として使用された上段の間。その壁は総金箔押し、天井は折上格天井、武者隠付きという格式を感じさせられる部屋です。二百畳の台所、一度に二千人分の米が炊ける巨大な釜などは大寺院ならではのものです。「文麈」の署名がある書が掛けられていたので、若い僧に近衛文麈の書ですかと尋ねましたが、近衛文麈を知らないようでした。でも、そんな書が掛けてあってもおかしくないところでしょう。土室（つちむろ）といわれる囲炉裏の間。これは土を塗り固めて作った部屋という意味で、土壁で囲んだ部屋に囲炉裏を設け、保温効果を高めて、高野山の厳しい冬の寒さをしのぐ工夫が感じられます。

前回この寺を訪れたときは広間に寺宝が展示されており、若い女性の僧が遍路姿の私を見つけ、恵果阿闍梨（けいか あじゃり）の像に案内してくれました。ご自身も車で四国八十八ヶ所をまわられたそうで、遍路なら興味があるのではないかと思います声をかけてくれたそうです。この僧と恵果阿闍梨や弘法大師について話をしました。

司馬遼太郎著「空海の風景」によれば、弘法大師空海の師、恵果は30歳で長安の青龍寺の東堂院を賜り、翌年には国師の称号を賜っています。また三代の皇帝に灌頂の師も務めています。



金剛峯寺台所・奥は鼠除けの棚

空海は唐に密教を学びに行ったのですが、恵果の密教は当時最高のものでした。密教の二大教典に金剛頂経と大日経があります。精神原理を説く金剛頂経系の密教と、物質原理を説く大日経系の密教はインドで別々に発生し発達しました。そして前者は金剛智、後者は善無畏というインド僧が唐に伝えました。恵果は金剛頂系の密教を金剛智の弟子不空から受け継いだだけでなく、大日経系についても師の不空か、あるいは善無畏の弟子玄超から承ぎ、両系の相伝者として密教世界ではただひとりの人となりました。

恵果はこの両系の密教を惜しげもなく空海に伝えましたが、千人といわれる恵果の門人のなかで空海以前に両系を受け継いだ者は義明一人だけで、しかも空海が滞在中、義明は死の床についていたか、この時期に亡くなったかという状況でした。恵果は空海に3か月でその法を悉く与えた後、4か月後に亡くなりました。このため、空海は両系を受け継ぐただ一人の継承者となりました。空海は帰国後、金剛頂系と大日経系という二つの密教思想を一つの密教思想に論理化し、恵果の師の不空の密教でも、恵果の密教でもない、空海の密教である真言宗を成立させます。

以上が「空海の風景」の空海と恵果ですが、細かい所ですが、陳舜臣著「曼陀羅の人」との違いを書くと、「空海の風景」では恵果は大日経系の密教を金剛頂経系の師である不空から受け継いだ可能性にふれています。一方、「曼陀羅の人」では、インドから中国に伝えた善無畏の弟子玄超から継承しています。

恵果が不空から大日経系の密教を継承したとすると、不空の時点で両系が不空一人に収斂されていたことになり、恵果が両系の結び目となったという「空海の風景」の記述からすれば、これは不都合ですが、不空から恵果が伝授された説があることを無視しなかったことに司馬遼太郎の歴史に向き合う姿勢を感じます。

もうひとつ、恵果が空海の他に両系の密教を授けた義明について、「空海の風景」では空海が滞在中、「義明は死の床についていたか、この時期に亡くなったか」と書かれています。「曼陀羅の人」では、空海の『御請来目録』に書かれていることとして、恵果は死後門弟たちが空海を唐に引き留めることをおそれ、「義明はここにして伝えん（義明供奉は此処にして伝えん）」「空海はそれ行きてこれを東国に伝えよ（汝はそれ行きて東国に伝えよ）」と遺言したとあります。弘法大師空海の御請来目録は、伝教大師最澄が書き写した写本が残っていて、国宝に指定されています。そして、目録の終りの方にこの言葉が書かれていました。

陳舜臣氏は、義明を病身と書いていますが、目録からは恵果が亡くなる時点ではまだ生存していることが伺われます。司馬氏が亡くなっていた可能性に触れているのは、唐に継承者がいない状況の中で最後の力を振り絞って、異国の僧侶に法を伝える姿を描きたかったのか、謎が残ります。

高村薫著「空海」に「早く郷国に帰りて国家に奉り、国家に供奉して蒼生（人民）の福を増せ」（御請来目録）と空海に遺言したのも、この機を逃せば正嫡の法が絶えるという切迫した状況のためとされているが、千人以上の門下のなかで両部の大法を承継したのが最終的に空海一人であった事実は、運命若しくは奇跡という以外ない。とあるとおりで、恵果阿闍梨が最後の力を振り絞り、空海に法を伝えてくれたことによるものです。いずれも小説からの引用で創作もあると思いますが、歴史学者の北山茂夫氏（故人）もその著書の中で「恵果は中国の真言正統の第七祖にあたるが、空海の逸材をよろこび、これに灌頂（真言宗で受戒などのときに頭頂に香水をそそぐ儀式）を授けた。空海は恵果から金剛界大悲胎蔵両部の大法を授けられ、第八の師位を継いで遍照金剛の号を送られた。」（中央公論社日本の歴史4平安京）と書いています。まさに恵果阿闍梨こそ真言宗日本伝来の最大の恩人といってよいでしょう。（金剛界：金剛頂経の世界。大悲胎蔵：大日経の世界）

その後、中国では密教は絶えてしまいます。しかし、恵果から空海に伝えられた日本の密教は現代になり、中国に伝えられることになります。



壇上伽藍中門・右奥は根本大塔

金剛峯寺を辞し、壇上伽藍へ行きました。壇上伽藍は大師が高野山を開くに際して、真っ先に整備に着手した場所です。真言密教の根本道場として建てられた、朱塗りの色鮮やかな根本大塔は内部に胎蔵大日如来、四方に金剛会四仏、十六本の柱に堂本印象画伯の描いた十六大菩薩が描かれ、堂内が立体の曼荼羅として構成されています。朱塗りの中門や東塔も色鮮やかです。朱塗りの東塔に対し古色のついた木の落ち着いた雰囲気西塔は天保5年（1834年）の再建。地主神である丹生明神（一宮）、高野明神（二宮）、二王子・百二十伴神（三宮・総社）を祀る御社と御社の拝殿である山王院はともに文禄3年（1594年）の再建。14世紀前半に再建された国宝の不動堂など19の堂塔伽藍が立ち並び、そのうち国宝1、重要文化財11棟を有します。壇上伽藍は、胎蔵界曼荼羅を表し、そのため参拝順序にも決まりがあり、時計回りに参拝することが勧められています。

建物の以外の名所では、弘法大師にちなむ「三鈷の松」等があります。伝説では、大師が唐から帰国するとき、明州から教えを広めるのにふさわしい場所を求めるため、三鈷杵

（密教の法具）を日本に向けて投げました。帰国の後、高野山近くを訪れると、夜な夜な光を発する松があると聞き、そこへ行くと松に大師が投げた三鈷杵が引っ掛かっており、大師はこの地を密教の修行道場としました。そしてその松は三鈷杵と同じく、日本では珍しい三葉の松だったので「三鈷の松」と名づけられ、祀られています。ここの松葉をお守りとして持ち帰る人も多いそうです。

次回は宿坊について、お話したいと思います。

最 近 の 活 動

日 付	場 所	内 容	参 加 者
7 月 12 日	アミューあつぎ	定 例 会	会 員 15 名
7 月 12 日	アミューあつぎ	勉 強 会 「健康体操」	会 員 15 名
7 月 15 日	アミューあつぎ	交 流 会 「厚木市ボランティア連絡協議会」	会 員 5 名
8 月 2 日	東町スポーツセンター	鮎まつり支援	会 員 4 名
8 月 6 日	緑ヶ丘公民館	編集会議	会 員 3 名

編 集 後 記

暑い日が続いています。街中でのハンディ扇風機もすっかり一般的な持ち物になりました。くれぐれも熱中症にならないように注意して過ごしましょう。各地で観測史上の最高値が更新されています。（石川県・小松市で 40.3 度など）。8 月 2 日（土）にあつぎ鮎まつりの「大花火大会」が行われ、約 1 万発の花火が打ち上げられました。来年からは秋に開催することが決まっており、夏の花火は今年が最後になりました。

編集委員 小林 直樹 澤田 正弘 清田 邦男